

雪の朝、つらつらと想像が巡った

牧師 山本 護

礼拝堂、集会所、物置薪小屋、八ヶ岳伝道所の三つの建物は雪の中。三好達治(1900~1964)のよく知られた二行詩「雪」が連想されます。「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。／次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ」。激しく移りゆく世の雑音を吸い取って、深夜しんしんと降る雪。山の村には変わらない昔からの暮らしがある。懐かしく、平穏で、木版画のような場面がしっとり心に染みます。

都市育ちの詩人が、山村暮らしの実際を垣間見、衝撃めいた印象を内面化させます。「雪」はその生々しさを控えめに覆う民話ではないのか。初期詩集『測量船(1930)』には「雪」と共に「村」と題された二編の詩があり、その一はこう。「鹿は角に麻縄をしぼられて、暗い物置小屋にいれられてみた。何も見えないところで、その青い眼はすみ、きちんと風雅に坐つてみた。芋が一つころがつてみた(後略)」。「村」その二にはこうあります。「恐怖に澄んだ、その眼をぱつちりと見ひらいたまま、もう鹿は死んでみた。無口な、理屈っぽい青年のやうな顔をして、木挽小屋の軒で、夕暮れの糠雨に濡れてみた(後略)」。



さて罾でとった獲物をどうするか。放り投げた芋一つは、殺生に対する贖罪のつもりなのか。しなやかな野生と荒っぽい山村の人為(麻縄、木挽小屋)との接合に、ひどく胸をしめつけられる。小屋に縛られた鹿を見てしまった詩人の動揺、ありありと分かります。

礼拝堂は太郎の家、集会所は次郎の家、物置薪小屋はさしずめ三郎の家。これらの屋根に夜更けて雪がしんしんとふりつむ。朝、この透き通った光景を、静かにゆっくり剥がしてみると、「麻縄で縛られた、澄んだ目の、風雅に坐つてゐる、無口な、そして理屈っぽい青年のやうな顔」のキリストがおられる。そんな想像が巡ります。

「苦役を課せられて、かがこみ、彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった(イザヤ 53:7)」。信仰的な解釈は脇に置き、預言者の言葉からただちに浮かぶ感情が、「木挽小屋の軒で、夕暮れの糠雨に濡れてみた」十字架のキリストとして、私のどこかを直截に響かせます。

キリストの救いとは、「太郎や次郎の屋根に雪ふりつむ」、懐かしく、平穏で、母にいだかれるやうな安堵感ではありません。そしてその底部には、私たちが生きていることの、ひどく胸しめつけられ、動揺させられる、生々しい神の子の犠牲がありました。Ω